

メッセージ「聖なる者とされる」

水谷憲牧師

聖書 テサロニケの信徒への手紙 I 5章 16-24節

本日の聖書は、使徒であるパウロが書いたとされる手紙の中でも最古のもの、それは同時に、新約聖書に収められている27の書物の中でも最古のものであることを意味しているのですが、それが「テサロニケの信徒への手紙 I」であります。このテサロニケという土地は、当時のローマ帝国の属州であったマケドニア州というのが、今でいうギリシャにあったのですが、その首都であり、ローマ総督の駐在地でもありました。この都市は海路や陸路の交通の要所でもありまして、軍事的・経済的に重要な役割を果たしていたと言います。現在でも、このテサロニケという町は、アテネに次ぐ大都市らしいですね。そしてこの手紙の宛先であるテサロニケ教会というのは、西暦 50 年ごろ、ちょうどパウロの第 2 伝道旅行中に、パウロによって設立された教会でありました。この教会の大多数の信徒は異邦人でありましたが、この手紙は、異教徒に迫害されているこの教会の信徒たちを励ますことと、この教会からの質問に答えることが目的として書かれています。そして今日のこの箇所を含むこの手紙の後半部分は、主イエス・キリストの再臨に備えて、神様にふさわしい者となること、つまり、神様に喜ばれる聖なる生活を行うことを勧めるものとなっています。

16-18節は、大変有名な言葉ではありますが、ここにはキリスト者の生活の理想像のようなものが示されています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」。神様は私たちキリスト者がたとえどんな苦難のうちに置かれていようとも、常に喜び、祈り、感謝することを求めておられます。それは、喜びと祈りと感謝というこの3つは、私たちキリスト者の日常の生活の原動力として互いに補い合い、連鎖的に働くからです。つまり、喜びのないところには感謝の思いは生まれず、感謝の心に支えられることなしに祈ることはできないし、祈りの力を感じることがなければ、喜びや感謝は決して訪れないからです。

しかし、そうは言っても、それはなかなか難しいことです。「どんなことにも感謝し

なさい」と言われて、もちろん頭ではよくよく分かっているけれども、私たちの心の奥底には何らかの不安がこびりついているのではないか。本当に、本当にどんなことがあっても感謝できるのだろうか。例えば自分が何か嫌な思いをさせられたことに対しても、感謝できるだろうか。自分や家族が悪意の的となり、危害を加えられても、そのことに感謝しなければいけないのか。もしも最愛の者を失ってしまったときにも、私はそのことを感謝をもって受け入れないといけないのだろうか。それはなかなか難しいなんてもんじゃなく、そんなことできるはずがない。そんな時に私たちの心にわき上がってくるものは、嘆きや、怒り・悲しみであって、感謝の心など生まれようがないはずなんです。

しかし、ここで私たちが理解しておかなければならない大切なことは、神様は御自分は何もすることなく、私たちに到底出来ないことを高みから求めておられるのではない、ということなのです。神様はそんな到底無理なことを無責任に私たちに求めておられるわけではないんです。18 節後半には、「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」と書かれていますが、これらの無理難題に思えるような事々は、私たちが主イエス・キリストに連なっているからこそ、望まれていることだったのです。神様は、いきなり誰にでも彼にでもそんな大変なことを求めているわけではなかった。神様は、私たちがキリストにつながっているからこそ、まず私たちにそのことを求めておられるというわけなんです。

その私たちの主イエス・キリストは、どのようなことを経験されたのだったでしょうか。イエスは神様の独り子、この世を救うために神様によって送り出されたキリストでありながら、十字架という「神様に見捨てられる」経験をされたのです。それは言うまでもなく、感謝の心など全く起きようがない経験だったでしょう。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という叫び(マタイ 27:46)はまさに、嘆きや怒り・悲しみの経験でしかなかったことを物語っています。このように父である神様から見捨てられ、見殺しにされるというみじめで辛い、心痛む経験をされたキリスト、そのキリストが、私たちの嘆きの心を知らないはずがないのです。怒りに燃える心を知らないはずがないのです。悲しみに押しつぶされてしまいそうな心を知らないはずがないのです。そして私たちがこの同じ痛みを知っておられるキ

リストにすがり付いていく時に、私たちは自分をとりまく全てのこと、自分に降りかかる試練や災いをも含めて、全てのことを感謝することが、きっと出来るようになっていくのではないのでしょうか。

しかし、それはもちろん、無理してすべてに感謝するということではない。嘆きや怒り・悲しみのような醜い心や苦しい気持ちを神様の前に、キリストの前に正直に全てさらけ出して「神様、苦しいです。どうかこのような私をお助けください」と祈ることから、感謝は始まってゆくのです。もう少し言うと、ものすごく苦しい試練にあって「神様助けて下さい」と私たちが心から助けを祈る時、神様は必ず、必ず人を遣わして助けて下さる。共に寄り添い苦しんで、祈ってくれる人を与えて下さる。自分は独りではなかったのだと気付かせて下さる。かつてエデンの園で「人が独りているのは良くない。彼に合う助ける者をつくろう」（創世記 2:18）と言われた神様は、今でも私たちをそう思っていてくださっているからです。

そして、そのような体験を通して、与えられた試練が実はただの試練ではなく、恵みでもあったのだという気が、新たな感謝や喜びを生むのだと思うのです。ですから、ナザレのイエスをキリストと信じる、救い主と信じる私たちには、「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」ということが必ずできるはずだし、それは私たちにとって最終的にもものすごく大きな幸せにつながってゆくはずです。大切なのは「いつも」「絶えず」「どんなことにも」というところです。順調な時に喜び感謝することは、キリスト者だけに限らず、誰にでも簡単にできることです。しかし、それだけではなく、キリストに連なる私たちは逆境の時、苦しい時にこそ、努めて喜び、祈り、感謝してゆくということが求められているのです。もちろん、悲しい時には存分に泣いたらいい。キリストは、私たちの喜べない心、感謝できない気持ちをもちゃんと汲み取って下さり、喜び・祈り・感謝へと導いてゆく助けの御手を、キリスト自身苦しんだ十字架の上から、きっと差し伸べて下さるのです。

最初にもお話させていただきましたように、本日の箇所はテサロニケの信徒たちが主イエス・キリストの再臨に備えて、神にふさわしい者となること、つまり、神に喜ばれる聖なる生活を行うことを勧めるものであるわけです。しかしそれは、この当時のテサロニケの信徒だけに向けたメッセージではなく、時を超えた現代にあっ

てキリストと連なる私たちに対しても向けられているものでもあります。今の世にあっても、神様の御心は、私たちが神様に喜ばれる歩みをなす者、いわゆる「聖なる者」となってゆくことにあります。また、来たるべきキリストの再臨の時にあって、私たちが非の打ちどころのない者として永遠の救いと栄光に与る者となることにあります。

「非の打ちどころのない者」とは、「非難する余地のない者」という意味でもあります。「非の打ちどころのない者」というと「完全無欠」というイメージがありますが、完全な人間になることなどはキリスト以外には無理なので、「完全ではないけれども、特に非難するところもない」という理解で十分かと思っております。私たちは、キリストの来られる時、自分を「聖なる者」、せめて「非難する余地のない者」としてキリストをお迎えすることができるように、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝をしつつ、歩いてゆけたらと思います。ただ、自分の努力には限界があります。喜べ、感謝せよといわれても出来ないときはできないのです。そんな時私たちができること・なすべきことは、まず「喜ばません神様、感謝なんてできません神様、苦しいです、助けて下さい」と正直に祈り、私たちの痛みを知るキリストによりすごることです。必ず神様は人を遣わして下さる。助け手を送ってくださる。そして 2 つ目は、その時にそれを神様からの恵みだと感じることでできる感覚を養っておくことだと思います。そうした時に、私たちは喜びと祈りと感謝からなる生活へと導かれ、「非難する余地のない者」としていただけるのだと思います。

クリスマスを前にして、私たちは今一度、ベツレヘムでお生まれになるイエスがキリスト・メシア・救い主であることを改めて思い返し、自分の力により頼む思いを捨て去って、聖なるものと「される」ために、謙虚な思いに立ち戻りたいと思います。